

一七世紀英國における小土地所有の消滅

——土地制度の近代化と共同体——

大野 秀 夫

1

一八世紀のイングランドは、産業革命の準備として、ほぼ三〇年周期でおとずれる人口統計上の危機を回避するのに、他のヨーロッパ諸国に較べれば、なんとか成功していたといえる。⁽¹⁾しかしそれが、農業の、単位面積当りの生産性の向上によって達成されたものとは期待し難い以上、⁽²⁾従来の社会のバランスの崩壊という犠牲を払うことによってでなければならなかった。つまりエンクロージャーと小土地保有の消滅、そしてイングランドの資本主義化された農業に特有の「三分割制」を形成せしめたという事実に着目し、その原因の一端を見出し、検討を試みることは、それ故に自然のことであろう。

しかしながら我々はその課題に接近するのに、このイングランド農業、あるいは土地制度の近代化の過程を世界史の必然の進化の過程としてみることも、また西欧経済史学（「大塚史学」⁽³⁾によって代表される）及びそれと連動されて、戦後において数多くの優れた業績を残してきた法社会学・土地法史研究（特にイギリス）の如くに、共同体の内部に自生的に発生し、内部において自給自足がほぼ可能と思われる社会的分業圏としての「局地的市場圏」の形成と、

その順調な発展とによって作り出される「内部自給型産業構造」Ⅱ国内市场といった視角とは、別のところから接近したいと思うし、またそれは可能とも思える。

しかしそれは大塚「基礎理論」のマルクスとの相違、あるいはその歪曲を文献学的に追究するといった、余り生産的とはいえない試みとは異なるものでなければなるまい。

玉野井芳郎「マルクスとポランニーに関する省察——商品交換の外的性格の発見——」（『思想』一九八二年、七月）はこの点で重要な手懸りを与えるものと思われる。以下はやや長くなるが、多くの示唆に富むゆえに同論文から引用し、われわれの視角を明確なものとする便宜としよう。

「しかしながら、ここで商品経済の論理的展開を閉塞させるひとつの難問が控えている。われわれは物としての財の市場の存在を論理的に仮定することは可能であるけれども、労働市場の存在をいきなり仮定することはできないのではない。人間労働は一体いかにして労働力として商品となるのだろうか。この説明なしに、労働市場の存在を理論的に仮定することはゆるぎないはずである。正統的な近代経済理論はこの点の反省をまったく欠いている。マルクスは、この説明のために『原始的蓄積の秘密』という名の詳細な歴史的叙述を商品経済の論理の側面から導入している。『資本論』第七編第二十四章の叙述である。この特殊な歴史的行程に謎（不可解）を含意する *das Geheimnis* という言語があてられているのは限りなく興味ぶかいことに思われる。それは、西ヨーロッパの辺境のイギリスを例証に、十五・六世紀から十八世紀にかけて、共有地の収奪に始まる『囲い込み運動』のドラマチックな歴史的過程である。それは経済学が、資本の蓄積を語る前に、資本そのものがいかに発生するかをめぐって説明である。それは物の論理として論理的に与えられるものではなく、これとは異なる人間生活の実体Ⅱ實在の歴史として叙述されるのではない、ということが示唆されていて、重要である。

封建社会の解体には、……(中略)……なんといっても、中世社会の民衆をささえていた農業生産の担当者である農民 (peasant) が『困い込み運動』をとおして、各地域の村の土地から出てゆくことが封建制解体の根本的条件だった。脱農した生産者たちは、やがて都市や農村の小工場へと吸収されることになる。」(六頁)

「マルクスによると、この歴史的過程が進行するにつれて二つの相對應する基本的事実があらわれてきた。一つは土地という生産手段から分離されたいわゆる無産労働者が形成されたこと。もう一つは、農民のいなくなったあとの土地が、第三者の手で排他的に取得されて、それを自由に転売したり賃貸したりする土地の商品経済的私有制ができあがったことである。つまり、労働力の商品化は土地の私有化と対応している。その点で、資本主義的私有制の歴史的発生は土地の私有化を出発点とするものだともいえる。」(六頁)

「ボランニーによって明らかにされた歴史的事実は今日の時点で瞠目にあたいる。一方、A・スミスの『交換の神話』に始まる正統的経済学と経済史学はわずかに次のような一連の演繹的仮定をもうけるにすぎない。まず barter という個別的行為を仮定する。それはやがて時とともに地方市場への発展へと導かれる。そして後者が仮定されるや、国内的市場または全国的市場の確立へと自然に導かれる、というのだ。しかし、『これはいづれも事実と相容れない』とボランニーは該博な歴史的事実に訴えて主張する。このボランニーの認識は近代社会を普遍化原理とする正統派経済学と経済史学とからはとうてい導出されえないものである。」(一〇頁)

もとよりここで我々はマルクスなり、ボランニーなりの歴史認識を権威あるドグマとして拝跪する必要はいささかもあるまい。例えば、実際にはエンクロージャーの影響は、マルクスの考えたほどには、イギリス全土に及んだものではない、というように⁽⁵⁾。

だが、自給経済が優勢であり、市場が生産資源の生産量、利用及びそのパターンに及ぼす影響の程度が限られ、人

口の大部分が文字通りに、収穫される穀物の量に依存しており市場が重要性を余りもたない、といった静能性が一六七世紀の農村について指摘されており、更には、国際間貿易の方が国内貿易よりも安価であった時代、つまり各国間の分業が国内の地域的分業に先行していたことが明らかにされていることを考えとき、前記の示唆するところは、充分注意に価するものと見做してもよい。

我々はただその示唆するものを一つの手懸りとして一六―七紀のイングランドの社会変動、土地制度の近代化の過程を叙述・検討すればよく、それをもって最終的にはかかる優れた二人の理論家の理論の射程を検証すればよいのである。

そして我々はこれまでにイングランド社会、土地制度の近代化と共同体の変容、それに伴う土地所有権あるいは社会の概念の意味内容の変遷についての若干の考察を行ってきた。⁽⁷⁾それによって、イングランドの「近代」を析出せんとしたのであり、本稿もまたこれと意図と内容において連続している。そしてここでは、一七世紀における小土地保有の消滅、エンクロージャーイギリス農業の資本主義化と共同体の解体という、社会の全体構造の変容の問題を、最近のイングランド地域史・社会史研究に依りつつ、相連関させて考察を加えてみることにしたい。それというのも、個別地域社会史の研究は、イングランドの（土地）法の近代化といった一般的命題への接近とは、一見したところでは迂遠の如くにも思えるが、逆にこうした地域の特異性を析出することによって、社会と法の近代的形成についての一般的特色、諸要因が解明されるかもしれず、またこうした諸特色・要因が社会構造に照応した形で組み替えられてゆくということも考えられ、またそれによってイングランドに特有の近代社会及び法が形成されたともいえるのであるから。⁽⁸⁾

① ケムブリッジ、チップペンハム Chippenham の場合⁽⁹⁾。

チップペンハムは、ケムブリッジ州の北東、ニューマーケットに近く、サフォーク州と接するところに位置する、白堊質の土地 chalkland の教区である。我々は先ず、ここでの小土地保有の消滅の過程をみることから、検討を始めよう。

チップペンハムの耕地 field は八つに分かれ（一五四四年）、極めて複雑である。しかしそこで輪作される作物は比較的単純で、冬播きのライ麦が、耕地面積の半分を占め、残り半分は春播きの大麦 barley が栽培され、小麦、オート麦、えんどう豆⁽¹⁰⁾は僅かである。もろい砂質のチップペンハムの土壌には、とりわけライ麦の栽培が適していたようである。

前記の開放耕地とは別に、チップペンハムは二つの広い共同入会地 common が存在する。今日において、ニューマーケットをサラブレッドの育成・調教の中心地たらしめている良質の牧草地がそこにはあり、このことは一六―七世紀においても高く評価されることには変わりなかった。そのためにまた、領主にとっては直営地としての困い込みの恰好の対象となり、農民にとつては、生計維持には必須のものとして、一六―七世紀にわたって、幾度か領主―農民間の紛争の原因となったのである。

この紛争の最終的結果は、農民の放牧権——羊の飼育が主であり、穀物栽培による土地の疲弊を防ぐには不可欠であった——の否認となったものと思える。一七〇二年、マナ領主 Lord Orford が獵園化をはかる際⁽¹¹⁾、保有者の同意を得るための妥協として、家畜——ただし羊については認めていない——の放牧権を再認することになったのは、こ

のことを物語っているといえよう。

チップンハムが一六六〇年代中頃に少なくとも有していた六七の戸数は、この獵園化によりその地域内に二五戸を数えるのみとなった。一五四四〜一六六四年間において、一六三〇年代の一時的人口増を除けば、比較的に静態的であった村の人口は、この獵園建設により相当の戸数の強制的な立ちのきを迫られたと見てよいであろう。⁽¹³⁾

このマナ領主による共同地の囲い込みは、小農消滅をチップンハムにおいて決定的に宣するものではあるが、それが直接のそして唯一の原因と見做すことは早計であるかもしれない。それというのも、小土地保有の消滅の傾向は既にそれ以前に始っており、マナ領主の獵園化の試みの成功は、むしろこうした現象の結果といえるものだからである。スパッフォードによって析出されたチップンハムの農民間の土地配分の状態は、このことを明らかにしているものと思われる。それ故以下では、この村における土地配分の状態を見ることとしたい。

一五四四年、当時のマナ領主 Sir Edward North による測量書には、総面積一二八六エーカーの土地に四五の保有者名が記されている。保有態様については、謄本保有が圧倒的多数であり、自由保有は六名が僅かに一〇エーカーを占めるに過ぎない。⁽¹³⁾ 中世に典型的な農民の保有サイズを一 $\frac{1}{2}$ ヤードランドにとれば、一二名がこの枠内に入る。⁽¹⁴⁾ この中間層の下には零細農ともいふべき一八名が、とりわけ二エーカー未満の極小の地片しか有しないものが四名を数える。その一方で、残り一五名は四〇エーカー以上の規模を有し、村最大の謄本保有者は一〇一エーカーの土地を保有している。

これが一五六〇年の貸付台帳 *rental* ⁽¹⁵⁾ ではかなりの様変りを見せている。即ち、保有者数は二八へと減少するとともに、保有の大型化・集積が顕著である。さきの中間層を構成するものは一二↓九へと、大農は一五↓一三へと数的には減少しているが、零細農の一八↓六への激減と比較すれば、その比率において上昇していることが分⁽¹⁶⁾かり（大農

三三・三一四六・六％、中農二六・六一三二・一％、零細農四〇・二一・四％)、最大のものは二〇〇エーカーを保有している。

更にいま一つ注目されるべき事柄は、定期借地 *leasehold* の増大——それまで〇であったものが一二六・五エーカーに一五六〇年にはなっている——である。謄本保有地がしばしば $\frac{1}{2}$ ヤードランド当り年八シリングであったのに比し、これらの土地では二〇シリングの地代で保有されていたのであるから、領主にとって、こうした変化は有利に作用したと想像するに難くない。

一六三六年の測量書は、この村の一〇〇年前の土地配分とは全く異った様相を示している。

中世に典型的な規模をもつ保有者は、二名へと激減し、四〇エーカー以上の保有者が一名となり、また零細農も一名となつてゐる。保有の統合・集積の傾向は明らかであり、このことは九〇エーカー以上を保有するものが六名へと増加している(一五四四年、一五六〇年にはともに三名) ことからうかがえる。そして定期借地も約七〇〇エーカーへと、一五六〇年時点から見れば五〇〇エーカー以上も増大し、謄本保有——定期借地の比率が全く逆転している。ここにおいて中世の農村構造の基幹をなす小土地保有者、とりわけ $\frac{1}{2}$ ヤードランドの基準的保有をもつものが消滅していることは明らかであり、一六一七世紀前半の間に、とくに一七世紀初の三〇年間に、チッペンハムは大きな構造の変化を被つたことが見て取れよう。ここチッペンハムにおいては、小土地保有の消滅は、しばしば考えられるような、一八世紀の議会エンクロージャーに起因するものではなく、既にその抬動以前に、決定的な変化を受けていたのである。⁽¹⁹⁾

このチッペンハムの小農消滅は、文字通りにトニーの見解を例証するかの如くに思える。つまり「法的見地からすれば、この時代(一六世紀)の大きな特色は、謄本保有権と定期借地権とのあらいであり、そして後者の勝利で

ある⁽²⁰⁾」との英国農村についての歴史的理解をである。

しかしこのトニーの見解に対し、スバッフォードは否定的である。その理由として、たしかに一七世紀末のマナ領主の獵園化の試みに対して、保有者側の抵抗がふるわなかったことが示すように、保有者の法的地位の弱さが見られることは事実であるが、若干の例外はあるにしてもチップペンハムの膳本保有が世襲のものであり、保有者の権利は、*to him and to his heirs* に対し承認せられていたことを挙げている。「ケリッヂ博士の、世襲膳本保有権の完全性についての主張が正しいとするなら、領主によって慣習保有地を転換するためにとられた行動は、土地保有の純然たる法的性格以外の他の要因が、保有者に売却すべく強力な誘因として働かないかぎりには、成功し得なかったであろう」と述べ、トニーの領主搾取Ⅱ法原因説を疑問としている。但し、任意で *at will* で保有された慣習保有地について（四ヤードランド）については、一六三六年までに定期借地へと転換されていることは認めている⁽²²⁾。

第二の理由としては、基準サイズの保有者の消滅は成功した仲間の保有者の犠牲となったのであり、領主のそれとなったのではなく、大規模な膳本保有の残存がその証左である、とする⁽²³⁾。一六世紀末から一七世紀初の経済不振がかかる変化の背景としてあり、それが小土地保有者をしてその保有を売却へと至らしめた理由であるとする。もっとも、このことは小土地保有者が経済危機に対応し得なかったというよりも、大規模保有者がこの好機を利用するのにより有利な立場にあったことに帰されるべきであるとしている⁽²⁴⁾。

なお、均分相続の慣行が保有サイズの縮小をもたらし、それが経済不振に際して抵抗力を弱め、土地の統合・集積を容易にしたということも、個別的には考慮されるべき事情であるかもしれないが、全体としてこの時代の平均家族規模を考えると⁽²⁵⁾、余り重要な意義はもたなかったと考えられる。

我々はここでスバッフォードの小農消滅についての見解について、

- (i) 土地保有のタイプとは無関係である
 - (ii) 小土地保有の消滅は、成功した同僚の大規模な保有に吸収された
 - (iii) 領主の行動は消極的意義しか有しない
 - (iv) その消滅の背景には一六世紀末の経済不振、凶作が考えられる
 - (v) 相続慣行による保有の縮小は余り重要性をもたない⁽²⁶⁾
- ということを確認するにとどめ、ケムブリッジの別の地域の場合を見ることとしたい。

② ウィリンハム・Willingham は、同じくスペースフォードにより紹介されている沼沢地 fen に富む教区である。⁽²⁷⁾ ウィリンハムは四五〇〇エーカーを超える広大な面積をもった教区であり、一〇〇〇〜一二〇〇エーカーの三つの耕地とほぼ三〇〇〇エーカーのフェンとから成立っており、Burne と呼ばれるサブマナがあるが——一六〇エーカーの直営地と六〇エーカーの膳本保有地からなる——マナと教区とは一致している。

このウィリンハムの大部分を占めるマナが、Bishop of Ely から一六〇一年、後にフェン地方 the Fens の干拓にも関与した Sir Miles Sandays の手に渡ったことから、領主——保有者間の紛争が生じた。

この紛争は、当時の教会領のマナにしばしば見られるような、領主直営地の確定が困難であるという事情によって、マナ領主の立場を著しく不利なものとした様子をうかがわせると同時に、不在領主と、ウィリンハムのフェンの共同入会地の運営が相当の組織化を求められるという理由とで、自治と自律とに対する強い共同体的感情の発現がみられる恰好の実例とみられるかもしれない。保有者たちは、マナが売却される際、自分たちで買上げを図り、その計画がうまく運ばなくなると、領主の所領への鑑定・立入りを妨害するという行動に出たのである。⁽²⁸⁾ この経過を、領主サンデーズは次のように訴えている。

「Richard Person」……その他の直営地の農民は、……自分たちの思い通りの額でマナの買上げを成し遂げられなかったことを不服としており、……割り前、寄金を募り、……マナに関連して、臣下たる私により開始せられた訴訟は何であれ、全てを維持し maintain、そればかりか、前記のマナへの立入りに対し、裁判に訴えて、女王陛下の臣下を非度く悩ませ、苦しめている」⁽²⁹⁾

全村を巻き込んだ保有者側の抵抗は、一六〇二年サンデーズによる採草地、フェンの囲い込みによって、更に現実味を帯びる。

「Richard Person……（他一九人の氏名が列挙されている）及び未だ名前も知らぬマナの他の保有者は、剣、棒、匕首、三つ又 pitchfork、ころはし mattock、鋤、シヨベルなどの武器を帯びて、暴徒のごとく不法に、先述の採草地に侵入した。女王陛下の臣（である私）は極力、暴徒と化した乱暴なものたちに静まるよう説得につとめ、……仲裁その他様々の方法を用いた。……しかし彼らは、敵意を持ち続け、陛下の臣に対し反抗的で、様々の訴訟でおいに悩まし苦しめ、よい条件での和睦の申し出を拒むばかりか、更には直営地である採草地に立入り、……そしてここに四〇頭を超える牛を放ち、……そこに生えていた草を食い尽してしまった。かかる不法な行為を、マナの荘役 baile Alexander Bowles 及び John Cole（他六名）は、四月二七日彼らに通知し、さきの四〇頭の牛を差押え distress、連れ去り、……共同地の獣欄 common pound へと駆り立てた。しかるに荘役らが牛を追ってゆくと、……（武装した保有者の氏名が列挙されている）暴徒が集まり、John Cole に暴行を加え、四〇頭の牛を持ち去った。彼らは John Cole を手非度く打ちすえ、乱暴を加えたので、彼はあやうく命を落とすところであつた」⁽³⁰⁾

ここで述べられていることには、恐らくは保有者たちの暴力性など多少の誇張はあるかもしれないが、実際の紛争の経緯を、そしてマナ領主の当惑を物語っているとみてもよいようである。保有者たちは、飢えた貧しき農民でも、

御しやすき従順・無教育なものたちでもなかったのである。⁽³¹⁾

この紛争は一六〇二年、Bishop of Ely の仲裁により一応の和解をみ、その仲裁は大法官府における判決 decree で確認される。⁽³²⁾

この和解の内容は、以前に存在した家畜の通行権は認めねばならないものの、かなりのエンクロージャーを承認する。その代りに、領主サンデーズが有する共同入会権は、その家畜の種類を問わず、Hempshall, Middle, Newditch Fens においては、以後完全に消滅する、というものであった。

この合意はしかし、両者とともに満足させるものではなかったらしく、マイルズ卿は実際に、一六二一年には大法官府で全面にわたって保有者との訴訟を再開している。膳本保有のサイズ、耕作地における領主飼羊権 fold-course、牛についての共同入会権及び保有者の放牧権、家畜の頭数制限 stint 等々をめぐってである。⁽³³⁾

世襲であるか否とにかかわらず、膳本保有者が一三世紀以来、その基準の保有サイズを拡大してきたことは事実らしく(一三世紀の時点でウィリンハムでの1/2ヤードランドは一五エーカーであったものが、一八世紀においては二〇エーカーにまで拡大されている)、この点についての領主の主張は正當なものといわねばならないようだが、⁽³⁴⁾紛争の核心は双方にとって、フェンの囲い込み、干拓、入会権をめぐってであり、零細農、貧民にとってはとりわけ入会権の存亡は、自らの生計の維持に必要のものであった。⁽³⁵⁾領主のエンクロージャーによって失われた共同入会権は、彼らにとって大きな損失であり、一六〇二年の和解は保有者にとっても不満だったのである。この紛争が保有者側に有利に傾いたのには、一つには先に述べた共同体的感情の強い存在があるが、いま一つには、フェンランドの干拓に關与したマナ領主の財政的破綻が大きく作用している。⁽³⁶⁾ウィリンハムの保有者たちは、この領主財政の窮状につけ込み、漸次に断片的な形で数百エーカーにものぼる耕地——それまではリースされていた——を自らの保有に付加すること

により、この代償を領主の入会権の消滅と併せて、その後に克ち取ることができたのである。⁽³⁷⁾

耕作地はウィリンハムでは Cadwin, West, Belises の三区画から成り、各保有は三地区に均等に配分されている。

小麦、meslin⁽³⁸⁾ の栽培が耕地の四〇％以上を占め、大麦が残りをおさめるが、基本的にはこの村では農耕は余り重要性をもっていない。

ウィリンハムの農業経済を支えるものは、牧畜 stock-farming、搾乳、漁撈、狩猟（鳥）であり、こうしたことについての強い共同体的な規制が一七世紀後半においても実施されていた。

羊についての頭数制限 stint は一六二一年時点にあっては $\frac{1}{2}$ ヤードランド当り三〇頭と定められていたが、厳格に守られていた様子はなく、また理由は不明だが、羊はあまり重要なものとは、この村では考えられていなかったようである。

牛・馬など大型家畜についての頭数制限が一七世紀以前に存したか否かについては確かではないが、一七世紀中葉には人口上昇の結果として、牛などについて頭数制限の実施が図られた。⁽³⁹⁾ Middi Fen などに入会権を有するものは一戸当り八頭の牛・馬を、また $\frac{1}{2}$ ヤードランド当り四頭の牛・馬の頭数制限が定められた。 $\frac{1}{2}$ ヤードランド未満の保有については、その比率によって定められた。但し牧草のより必要な馬の、牛に対する割合は詳細に定められており、四エーカーの耕作地の保有は牛一頭分の入会権を与える一方、馬一頭については五エーカーの耕作地の保有を必要とした。Middi, Newditch Fens では、馬は全体の $\frac{1}{3}$ というように制限されており、それを超えては馬一頭は牛二頭分に換算される、⁽⁴⁰⁾という具合であった。

これによると頭数制限が正確に守られたと仮定してもウィリンハムには最少でも一〇〇〇頭ほどの牛馬が、恐らく実際にはそれをかなり上回る頭数が飼育されていたことが分かる。フェンの共同地は豊かであり、他の地域では生計

の立たない小地片しか有しない零細な保有者、雇傭労働者であっても、生計の維持が可能であり、細やかながらも息子や妻に家畜や金銭を遺すことも可能であった。⁽⁴¹⁾

我々は以上のようなフェンの重要性を考慮に入れつつ、以下では一六〇七世紀において生起した土地配分の変容について検討を加えよう。

一五七五年にはウィリンハムは七六戸——その内二三戸は土地を持たず共同入会権のみを有する——の保有者及び又貸しされていると考えられる二四戸の家屋とが存する（合計一〇〇名）。

数的には膳本保有者が四〇名おり——サブマナのものは除く——一五〇三〇エーカーの基準保有サイズに該当するものが二八名存し、自由保有を有するものは一三名を数えるが重複は少ない（三名）。George Crispe⁽⁴²⁾だけが同村の例外的存在で、五六エーカーの自由保有と三八エーカーの膳本保有とを有する、村の最大の保有者である。

この一五七五年の測量書においては、氏名を記載された者一〇〇名の中、六七名は $\frac{1}{2}$ ヤードランド以下の保有であり、他の地域においてであれば自給は困難な保有であるが、フェンにおいては前にも記した通りに、必ずしも零細農あるいは雇傭労働者であることを、それらは意味するものではない。 $\frac{1}{2}$ ヤードランドの土地保有者は、ウィリンハムでは富農といっても差し支えないのである。⁽⁴³⁾

このウィリンハム村の構造は一六〇三年には既に幾分かの変化の兆しを見せ始めている。総戸数は一二五へと増加し、これと逆にさきの $\frac{1}{2}$ ヤードランドの土地保有は二八→二〇へと減少している。三〇年間に膳本保有、自由保有において $\frac{1}{3}$ 弱が分裂し、四三の保有の中、一三が別の家族の手に渡っている。その一方では、半数以上の家族は依然として元の状態に、保有の規模に関してはとどまっている。⁽⁴⁴⁾目立つのは保有の細分化であり、この傾向はフェンの資源の限界まで続く。この保有の分裂とその限界とは一七世紀中頃の家畜の頭数制限による共同体規制において、既に看

取することが可能であるが、一七二〇年代に実施された測量書において顕著である。⁽⁴⁵⁾

そこでは一五七五年において存在した二八の $\frac{1}{2}$ ヤードランドは、七六名の保有者の間で分割され、一人の保有者が自由、膳本保有の小地片を、あるいは一―二エーカーの直営地、更には定期借地——その面積は他の保有に比して小さい——をも保有する状態が通常のものとなっている。保有者の総数は一五三名にまで増加し、村の中間層を形成していた $\frac{1}{2}$ ヤードランドの膳本保有者は、⁽⁴⁶⁾完全に消滅したといつてよい。

この点に関して、相続慣習の及ぼした影響は重要なものとして、あるいは主たる原因として見做し難いのは、前記チップペンハムの場合と同様であり、複数の息子をもつ例は少ないし、ある場合でも主たる保有地には手をつけず、購買した土地を次子以下には与えた例が多いからである。⁽⁴⁷⁾

これと同様に小土地保有の消滅に、領主の行動が関与しているとは、少なくとも一七世紀前半の紛争から見る限りでは考えにくい。

それよりはむしろ、一六世紀末まで保有の基準単位が維持されており、一七世紀に分裂・細分化の傾向が見られるのは人口増とともに、領主の財政的破綻と相乗した領主のマナ統制の喪失の結果とも考えられる。保有の細分化と混合によって、中世において重要であった保有態様の差異を実質的に無意味なものと化したのは、かかる事情を反映しているとも受けとれる。

いま一つ注意されることは、定期借地の増加が、この時期において①のチップペンハムの例ほどに著しくなく、また膳本保有の置換といった現象が見られず、むしろ自由保有化が目立つことである。領主の財政的窮迫は土地の売却を強いたが、保有者はこの機を利用して自由保有化を図ったと考えられる。したがってその基底には領主的統制の強弱が、また共同体的な感情の存否が小土地保有の運命と関係していたと見ることができよう。そして、チップペンハムの

如くにマナ領主の統制が一定程度貫かれていた場合においては、領主は経済的により有利な定期借地の設定の方向をとった、と。膳本保有の定期借地への転換を図る際、しばしば用いられる手段の一つとして直営地の拡大があるが、このような現象はウィリンハムでは見られない。この方策により、一方では保有の統合・大規模化が行なわれ、他方では定期借地が進展する。しかしウィリンハムでは、一六世紀末に至るまで教会領であったこと、そしてフェンの資源的豊饒さがかかる方向とは逆に、保有の分裂、細分化、混合をもたらし、保有のタイプの差の実質的解消、中世的な保有の基準サイズの消失をもたらしたと理解できないであろうか。

我々はここでケムブリッジ州の二つの村から離れ、次にリンカン州の同様のフェンと chalkland の地域の十六七世の変容を、J・サースクの研究によりつつ見てゆきたい。⁽³⁰⁾ サースクの研究はその力点が農業史におかれ、前記の二村ほど、村の全体構造を明らかにしてくれるものではないが、それでも一定程度の比較は可能と思われ、補足的なものとしての意義は少なくとも有するであろう。

③ リンカンのフェンランドの歴史の画期は、そこでの干拓の進捗であり、それは同時に一七世紀英国の大規模な土地改良事業の典型でもあった。

フェンランドは河川・海が深く侵入し、また気候条件の悪さが加わり、居住条件は余り良好とはいえない地域であったが、しかし広大な低湿地の有する放牧・採草地とその肥沃さとは放牧農業を可能とし、そして小地片の耕作ではあれ豊穡さをもたらし、多大の人口を許容することができた。⁽³¹⁾

この地域の干拓計画はエリザベス治世期に既に存したが、具体的に表面化するのはジェームズI世治世であり、国王財政の新たな収入源の捻出ということを専らの関心とし、Cornelius Vermuyden らが中心となって実施されたもの

である。⁽⁵²⁾

領主にとって、従来荒蕪地 waste であったものが、干拓により耕作地となることは地代の増収につながるが予想でき、歓迎すべきものといえよう。他方、フエンランドの人口上昇、それにともなう放牧地の不足とは既にエリザベス期に顕在化しており、一七世紀に入ると、それは共同入会地の囲い込みとしてあらわれてき、放牧地の不足という問題の解決は深刻であった。合意によるエンクロージャーは容易ではなかった。⁽⁵³⁾しかし放牧地の不足は、単に面積の人口に比しての少なさという物理的理由のみからではなかった。「入会権 common right をめぐる紛争原因のうち、最も重要であり、放牧地不足の因となったと思える事柄は、富農 better-off farmer による制限頭数以上の放牧であった。旧い平等主義的原則——何人も冬に自分の土地で飼育可能な頭数以上の家畜を夏に飼育してはならないとの原則——が富農に對し、……持ち出された」⁽⁵⁴⁾からであり、その主張も旧来の伝統に根ざしながらも、決して復古主義的とはいえないものであった。放牧地の不足は深刻な問題であったとはいえ、干拓が唯一の解決策といえるものはなかった。

干拓に対するフエンランドの保有者の抵抗は、伝統的農法への固執とともに、土地不足の解消が、外部からの資本の導入、国王、商人、土地改良家、干拓業者の関与によってなされ、地域の実情、干拓のもたらす社会的結果についての配慮が閑却されてことに対する懸念からもある。⁽⁵⁵⁾この点の懸念は早くから存在し、実際に、とくに国王によってなされた干拓は、放牧地の激減を招くものとして、住民の強い反対を引き起さずにはおかなかった。長期的に見れば、干拓はそれまでの豊かな放牧地を耕作地へと転化させることにはなるが、外部資本の導入は投機、領主の食りを招くことにもなり、実際に長くにわたって伝統と経験とに培かれた放牧農業は一定の繁栄の享受を可能としていたし、部分的には干拓はマイナスへと作用した場合もある。⁽⁵⁷⁾サースクによれば、「全ての状況を考慮に入れると、干拓

に対する地域住民の反対の強力さは、その憤怒と釣り合っていないわけではない、との結論は避け難い。フェンランドの住民が性格上近隣のものよりも好戦的であったということではなく、……干拓が彼らの生計の基本的手段に対する侵害を構成したということ」が指摘されるという。⁽⁵⁸⁾

削減された放牧地の代償を一応住民側は一六四一年には得ることができた。例えばアクゾルム島 the Isle of Ax-holme においては、当初干拓後の住民に対する共同地の割当分は $\frac{1}{3}$ であったが、ほぼ $\frac{1}{2}$ にまで増やされた。⁽⁵⁹⁾ Growle マナにおいても漁業権 fishing right を有した膳本保有者たちは、干拓により年三〇〇ポンドの地代に相当する漁場を失ったが、その代償に一二三エーカーの土地を得た。こうした住民側の部分的ではあるにせよ勝利の背景には、さきのウィリンハムの場合と同様、フェンランドの共同地の資源の豊饒さとその利用についての共同体規制の発達とが村の組織的抵抗を可能としたという事情があるが、しかしそれにもかかわらずその代償として獲得したものは、富農のそれに比較すれば小さなものにすぎなかった。

富農層は干拓事業を支援し、その結果として事業完成後には事業施工者、国王の持ち分となる土地について、定期借地に対する優先的地位が与えられた。こうした富農は、これにより広大な土地を得て、さらにはそれを村外者に転貸し、村内の小土地保有者に貸与される場合は少なかつた。⁽⁶⁰⁾ 貧農、富農を含め、全ての農民が制限なく自由に放牧農業を営むことのできた伝統的な農業は、その復活を望むべくもなかった。

しかし、フェンランドでは、内戦の勃発が農民に好運をもたらした。干拓により失われたフェンの共同地の全てを取り戻すことができたのである。⁽⁶¹⁾ アクゾルム島の堤防は破壊され、水を引き、アドヴェンチュアラーズ Adventurers の土地に家畜を放牧した。A・トマス卿は East, West Fens から一六四二年に、リンゼイ伯 Earl of Lindsey は Lindsey Level からそれぞれ追い出される、といった具合である。国王の持分について、Bourn, Gosberton, Great

and Little Hale, Pinchbeck, Spalding のフェンに有した四二三九エーカーにものぼる土地が住民によって奪い取られ、その土地は以前の如くに共同地として供された。堤防などの施設の破壊は農民の行動を恒久的なものとし、王政復古後も一部の地域を除いてその状態は継続した。⁽⁶²⁾ 干拓事業の再開は一八世紀以降に持ちこされたのである。

フェンランドにおいては一六世紀において土地の細分化は著しく、大規模な保有の出現は阻まれていた。サースクの調査した五つのマナについて見れば、保有の転貸なども多くみられその実態はつかみにくいしながらも、メジアンは四エーカーを示すという。保有態様についての複雑で、かつてデーン人の定住した地域とそうでない地域とは異なり、また定期借地の割合もマナによりまちまちで、〇〇六〇％、膳本保有も〇〇九二％までかなり異なるが、総じてリースの多いところでは膳本保有は少ないといえ、またその逆もあてはまる。⁽⁶³⁾

フェンランドの農業の中心は放牧農業で、干拓後も住民の持分については、以前のごとくに、エンクロージャーの合意がなされない限り、共同放牧が維持された。⁽⁶⁴⁾ 中心は酪農で牛が主となり、サースクによれば、一六世紀の典型的農民ともいべきもので、牛七、馬六、豚三、羊二〇頭を有していたといい、ほぼこの数値は一六世紀を通して保たれていたといわれる。⁽⁶⁵⁾ 一七世紀における変容の主たる特色は羊の増加である。一戸平均で、一六世紀末には二六頭であったものが、一六三〇年代では二四、六〇年代には五〇、九〇年代には六二へと上昇している。これには羊肉嗜好の増大などもあるが、直接的原因は牛の疫病の蔓延にあるといわれ、フェンランドに限定された特殊な現象である。⁽⁶⁶⁾ この羊の増加、牛及び馬の減少はまた、耕作地で栽培される作物の変化、耕作地―放牧地の比率の変化とも関係してくる。その変化とは、干拓により、国王、施工者の持分となった土地は耕作地へと転換されたが、そこではオート麦、菜種の栽培が行われ、一七世紀を通じてフェンの住民の間にも普及した。それまでは大麦が五〇％以上の面積を占め、豆類(bean, pea)が三〇％を占め、オート麦は一％にも未だなかった。一七世紀においても、依然として大麦、

豆が主流ではあるが、漸次に侵透していったのである。菜種の導入は、当初は灯火用、羊毛調整剤としての菜種油が目的で、風車を利用した製油場も作られる程に定着したが、その一方では羊の飼料としても用いられるようになった。旧来の農耕法に固執しつつも有利な作物の導入について、決して閉鎖的ではなかったのである。⁽⁶⁹⁾

フェンランドの人口は、一六世紀末〜一七世紀初のイングランドの全般的な人口上昇の中で、必ずしも顕著な増加をみていない。一六世紀中葉に既に人口稠密地域となっていた *Kilton wapentake* では、一五六三年に一四四一家族であったものが一七二三年には一四七二家族というように微増にとどまっている。村の間での人口移動は、土地とりわけ放牧地の供給の度合に応じて見られはするが、全体としての著しい上昇は見られない。但し唯一の例外はフェンにおいては人口の稀薄であった *Elloe* である。そこでは一五六三年に一四七三家族であったものが、一七二三年には二六九六家族へと約二倍の増加を示している。この地域は干拓による耕作地の増加が見られ、保有者、雇傭労働者を吸引する一方、旧来の共同入会地での *sint* のない放牧の慣行が、土地を有しない者ですらをも生計を見い出すことを可能としたのからである。⁽⁶⁸⁾

④ リンカーン州の高地地帯。

この地域は国王領、修道院領が少なく、史料に乏しいため、余り明確な姿をサースクは描いていない。ここは中央の谷によって石灰岩質 *limestone* と白堊質 *chalkland* との二地域に区分されるが、そこでの農業事情はほぼ同様のものと見做すことができる、という。⁽⁶⁹⁾

人口は稀薄であり、*limestone* の地域では三五家族以上を有する村は稀であり、土地不足の懸念は存在しないといつてよく、一九世紀まで耕作に供されることのなかった土地がかなり残っていたほどである。そしてこうした事情が大規模経営を可能とし、平均的には二六エーカー規模での耕作を営み、それ故たいていの地域で二圃制を採用してい

ることからすれば、約五〇エーカー程度の土地を保有していたものと見られ、八〇〜一〇〇エーカー程度の保有も多く存したようである。

ここでの中心は牧羊とそれを利用した農耕である。農家一戸当たりの平均はほぼ三六頭の羊で、その良質の羊毛は最重要の品目であり、イーストアングリアの織物業に供給された。牛馬はここでは重要なものではない。⁽⁷¹⁾

栽培される作物は前述のフェンランドと同じく大麦、豆類が圧倒的で各々六〇、一六％程度を占め、オート麦の比率が高い（九・三％）ことが目立つくらいである。

一七世紀以降においてもこの事情はほとんど変わらず、羊がその中心を占め、栽培作物にも変化は見られないが、それにもかかわらず一六世紀以来のエンクロージャーの進展がこの地域にも波及し、大きな変容を、とりわけ chalk-land の地域では被る。⁽⁷²⁾ 元来、人口が少ない地域のゆえに領主、富農層による保育の統合、集積・囲い込みは比較的容易であり、ミッドランド地方のような深刻な人口減少は生じなかった。

史料から判断すると、少なくとも一七世紀中葉までのこの地域でのエンクロージャーは、富裕ジェントリーによる市場志向的活動、羊毛生産を動機とする牧羊を目的としたものが多い、とサースクは述べている。⁽⁷⁴⁾ もとより牧羊、放牧地の拡大という目的のためのみならず、領主にとっては土地は個別的利用 severely された方が価値が高いといった動機もエンクロージャーには働いていた場合もあるう。しかし土地利用の高度化には当時の農業技術水準からして、それに伴う土地の疲弊を防ぐには、休閑、家畜のフンの利用、他品種の作付、施肥くらいしかなく、費用と保守性の中では多分に牧羊・放牧地の拡大の主張と結合しやすい性質のものであったし、地味の維持の主張と牧羊エンクロージャーとは軌を一にして進行することも可能だった。⁽⁷⁵⁾

一七世紀においてもこの地域の人口は静態的なものであるが、それでもエンクロージャーの進展が著しい地域にお

いてはかなりの変動がみられる。これは当然に牧羊エンクロージャーによる人口減少が一因として考えられる。例えば South of Louth における一八ヶ村から一五六三—一七二三年間に二二一家族が消え、また一〇四家族が他村に移住している。またフェンに近接する村では、フェンの干拓により、従来自由に放牧可能であったものがその放牧権を失った結果、土地を去らねばならないものもあった。この土地を失ったものたちは、一部は他村へと移住し、また一部は富農によって形成させられた大農場、あるいは家計 household の経営、運営へと吸引され、そして多くは近隣の繁栄する市場町へと流れ込み、新たな社会問題・文化的変容をもたらしていくのである。⁽⁹⁶⁾

3

我々はこれまでにケムブリッジの二村の一六—七世紀における変容の過程を概観し、これを補促するものとしてリンカーンの同様の地域についてみてきたのであり、それが不十分な比較・検討ではあったにせよ、何らかのまとめを最後に付け加えておかねばなるまい。

先ず第一に言えることは、フェンにおいては牧畜業、酪農中心の農業経済が小保有であっても経済的に存続可能たらしめたこと、そして領主的統制の弛緩の際には土地の細分化がもたらされたこと、保有は左程の重要性を有しないことが指摘されよう。⁽⁹⁷⁾ 逆にチッペンハムのごとく高台に位置する村では、中世に典型的な保有は整理・統合され、大保有が形成され、同時に領主直営地が拡大され、膳本保有が駆逐され定期借地がこれに替ったことが見て取れる。牧畜と共同入会権とが土地保有自体よりも重要とするフェンと、牧羊と農耕とが中心となる高台の村とは、中世以来の伝統的な村の構造が受けた変容は、過程と結果において多様であったことが示唆されよう。農業のあり方、土地利用の仕方、共同体規制・領主的統制—村の組織化の關係が小土地保有の消滅と深い関わりを有していたのが認められ

よう。

第二に、かかる土地の変動、とくにトーニイのいう謄本保育の基準サイズ消滅の原因について、その説明は甚だ困難であり余り見通しはつかないのだが、些かの言及がなされねばなるまい。トーニイは領主搾取Ⅱ法原因説をとるが⁽⁷⁸⁾、前述のスパッフォードの如く、当時の経済状況に説明を求めるものもある⁽⁷⁹⁾。

黒死病以降のイングランドは土地市場の不活発の中で、幾分か余裕のあるものは既にある保有を更に拡大することが可能であった一方、雇傭労働者も土地を取得することが可能となった⁽⁸⁰⁾。しかし一五〇〇～一六五〇年間の増大する人口、それによる食糧価格の騰貴は農村社会の全体構造に、そして土地配分に対して大きな影響を与えた。一五世紀中～一六世紀中の間に大麦 *barley* の価格についてみれば八倍にも騰貴しており、全体としての食糧品の価格は一六七％の上昇をみたという⁽⁸¹⁾。この余剰が地代の増額という形で領主に移譲されない限りは、自由・謄本保有を固定された慣習的地代で保有した農民は、耕作方法の改善や市場向け生産を増やすことがなくとも、繁栄は可能であった⁽⁸²⁾。だが逆に賃金労働者は実質購買力の低下ばかりか、エンクロージャーの展開と相乗した労働需要の減少が、生活の悪化に拍車をかけることになる。一六一〇年には最低となり、一六世紀の四四％にまで名目賃金が下落する程になる⁽⁸³⁾。問題はこの時期に中世に典型的な基準的保有サイズを有したものの後継者たち——一五～三〇エーカー程度の保有者であり、農村人口の相当数を占めた部分——がどのような原因で両極分解したかということである。

スパッフォードはチップペンハムの小土地保有の決定的転換期が一六世紀最末～一七世紀初であり、一六世紀の最後の一五年間の凶作との一致から、凶作による収穫不足が小土地保有の解体を促し、同時により大規模な保有者がかかる短期的不振から免がれたばかりか、仲間の不振という恩恵に浴し、その保有を吸入し得た、と理解する⁽⁸⁴⁾。たしかに凶作が実際に農村構造に与えた影響は深刻であり、農民叛乱・エンクロージャー調査委員会の設置も凶作の時期と符

合することが指摘されるし、そこから、法的状況からする領主による膳本の保有収奪よりも、こうした経済的要因が小土地保有の消滅に作用したとも考えられる。

しかし領主収奪Ⅱ法原因説にも一定の根拠はあるようである。この点については別の機会にも触れたのでここで深く立入る必要はないと思われるが、世襲保有以外については、相続時において他のものと保有承認料 *fine* をめぐり競合の可能性が存したし、また膳本を有しない慣習保有の場合など、領主の行動の影響を受けたとも考えられる。⁽⁸⁷⁾ 保有のタイプそのものが小農消滅の原因とはなり得なくとも、経済的不振と絡み合った場合には、保有のタイプが領主の行動の成否に一定の関係を有したと考えられよう。⁽⁸⁸⁾ チッペンハムのごとくに世襲保有者のみの場合以外において、どのような過程を沿ったか、更には農耕方法、慣習の強弱と地代較差と関係など、今後の事例の集積の中で深められるべき課題であろうし、更には現在の能力の及ぶところではないが、領主的統制の強度と小農民層の両極分解のあり方など、各国の比較検討の中で解明さるべき課題として残る。

いづれにせよ土地保有権の問題をどのように処理するかは、一国が世界システムの中でどのような役割を果たすかということと深くかわりをもつ。⁽⁸⁹⁾ 一七世紀初めの地代の物価以上の急速な騰貴により利益は次第に地主の手に集中され、この転換は財産権の再編を促し、⁽⁹⁰⁾ エンクロージャーの進展にともない、徐徐に個人の統制下に入った。このようにして形成されたイギリス農業の「三分割制」は、所領経営のための管理者の必要性を減少させた。農業においての専門化がはかられ、労働管理は賃金労働と貨幣地代を基本として達成することが可能となり、⁽⁹¹⁾ 農村の労働者を都市に引き寄せ、工業化の労働力となるべきプロレタリアートを形成させたのである。

我々にかかる一七世紀の土地配分の変容の過程、そこにおける法体系の果たす役割など、最近の地域史・社会史研究に依りつつ試みたのであり、また今後にも、さきに述べた不充分さを考慮しつつ、検討を続けたい。

- (1) Wilson, C.H., *The Cambridge Economic History of Europe* (=CEHE), vol. v, *The Economic Organization of Early Modern Europe*, E.E. Rich and C.H. Wilson, ed. 1977, p. 35., Lastett, P., *The World We Have Lost*, 2nd ed. 1971, chap. 5. I・ストーン「イギリス革命の原因」紀藤信義訳 一〇二頁参照。
- (2) Thirk, J., *The Agrarian History of England and Wales* (=AHEW), vol. iv, J. Thirk ed., 1967, pp. 197—9, cf, Wilson, op. cit., pp. 73—4.
- (3) 大塚久雄「共同体の基礎理論」(『著作集』七卷)及び赤羽裕「低開発経済分析序説」がその理論水準をみるのに好適の文献である。
- (4) もとより大塚共同体論を「局地的市場圏」にのみ限定することは正当ではあるまじ。大塚理論のもう一つの側面「即ちエートス論」「移行」の主体論がこれである。この点については言及の余裕はないが、Wilson, op. cit., p. 14, same, CEHE, iv, pp. 487ff. 及び、I・ウォーラス・ティン「近代世界システム——農業資本主義と『ヨーロッパ』世界経済」の成立——「『川北総訳』三九頁以下の指摘は、プロテスタントイイズム倫理と資本主義の成立との間の関係について、ウォーバートーニ双方の理解を疑問としつつその点を述べよう。
- (5) Hoskins, W.G., *The Age of Plunder: King Henry's England, 1500—1547*, 1976, pp. 69—71, cf, Thirk, AHEW, iv, pp. 240ff.
- (6) Giamann, K., CEHE, v, pp. 186, 187—8, 190ff.
- (7) 大野秀夫「英国土地法の近代化・序論」(『早大法研論集』一八号)「同」『謄本保有と英国土地法の近代化』(『三』)『早稲田法学会誌』二九—三一巻(『同』「一六世紀英国における謄本保有」(『早大法研論集』二六号)参照。
- (8) この点については Everitt, A., *Change in the Province: the Seventeenth Century*, 2nd ed. 1972, pp. 6, 7, 村上淳「近代法の形成」はしがき、14頁の指摘が参考となる。
- (9) Spufford, M., *Contrasting Communities: English Villagers in the 16th and 17th Centuries*, 1974, pp. 58ff.
- (10) Ibid, pp. 62—3.
- (11) 獵園建設のエンクロージャーはこの時期から顕著となり、それに伴う廢村もみられるよう。
- (12) Allison K.J., Beresford, M.W., and Hurst, G., *The Deserted Villages of Northamptonshire*, 1966, p. 14.
- (13) Spufford, p. 62.
- (14) Ibid, p. 67, Table I.
- (15) Postan, M.M., CEHE, ii., *The Agrarian Life of Middle Ages*, ed. Postan, M.M., 2nd ed., 1966, p. 618.
- (16) Spufford, p. 68, Tables 2, 5.
- (17) このことは零細農は雇傭労働者化したことを暗示する。

- (17) Spufford, p. 66.
- (18) Johnson, A.H., *The Disappearance of the Small Landowner*, 1909, chap. IV. だがこの見解の代表的なものである。
- (19) Hoskins, W.G., *The Midland Peasant*, 1957, pp. 141—3, 217—9, Howell, C., *Peasant inheritance customs in the Midland, 1280—1700*, in *Family and Inheritance; Rural Society in Western Europe, 1200—1800*, ed., Goody, J., Thirsk, J., and Thompson, E.P., 1972, pp. 191—3. だが *ワイルドマン・ノスターミンヤー* 及び *ワイルド同様のワイルド* 指標的なものである。
- (20) Tawney, R.H., *The Agrarian Problem in the Sixteenth Century*, 1912, Harp. Torch ed. 1967, p. 1.
- (21) Spufford, op. cit., p. 76, esp. pp. 71—2.
- (22) Ibid, p. 68, Table 2.
- (23) Ibid, pp. 76ff.
- (24) Ibid, p. 84.
- (25) Laslett, op. cit., chap. 4, pp. 84ff. はこの点について簡単な概括を与えてくれる。
- (26) 但し寡婦への遺産の分与の例は多く、保有の分化も考えられるが、その再婚も数多いので、保有の分散よりは集中へと結果したであろう。これを関連してスバッフォードは「ラスレットのいう、この時代において三世代家族は稀である」との説に疑問を示している。Spufford, op. cit., pp. 89—90, 111—114, cf. Laslett, op. cit., p. 91.
- (27) Spufford, op. cit., pp. 121ff.
- (28) Ibid, p. 122.
- (29) Ibid, p. 123.
- (30) Ibid, pp. 123—4.
- (31) Ibid, pp. 122—3.
- (32) Ibid, pp. 125ff.
- (33) Ibid, p. 125.
- (34) Ibid, p. 126.
- (35) Ibid, pp. 127ff.
- (36) フォンラハンの干渉については、本論文⑥（七五頁以下）を参照。
- (37) Spufford, pp. 127—8.

- (38) Ibid, p. 129.
- (39) 一五七五年には少なくとも一〇〇名の保有者が、一七二〇年には一五三名にまで増加しているが、それとともかなりの数の人口の移動がみられ、伝統的な農村構造を動揺させる一因となった。Ibid, pp. 20—2.
なお一六—一八世紀の人口の変動については Glass, D.V., and Eversley, D.E.C., ed., *Population in History*, 1965, Laslett, P., ed., *Household and Family in Past Time*, 1972. が参照されるべき文献であるほか、最近の人口史・社会・構造史研究については E・ル・ロワ・ラデュリ「新しい歴史〔歴史人類学への道〕」樺山紘一他訳、八二頁以下、中内敏夫『研究動向』史的人口動態史の成立と社会史（『思想』一九八一年九月）が参考となる。
- (40) Spufford, op. cit., p. 131
- (41) ノーメンは単に牧畜ばかりでなく、漁業によっても、かかる生活は可能であった。Ibid, pp. 133—4.
- (42) Ibid, pp. 135—6, Table 8.
- (43) Ibid, p. 137, cf. pp. 140—1.
- (44) Ibid, pp. 138—9, Table 9.
- (45) Ibid, pp. 145—6, Table 10.
- (46) これは単に数的にというばかりでなく、前記の一六〇二年の領主との紛争において暴徒としてその氏名が挙げられているもの多くは、この階層に属している。前註(29)(38)参照。
- (47) Spufford, op. cit., p. 160, cf. pp. 140ff.
- (48) Tawney, op. cit., p. 294. の外、大野「一六世紀英国における農本保有」六六—九頁参照。
- (49) 一般的に教会領が世俗領に比較してな経営が杜撰であったことがしばしば、Thirsk, AHEW, iv, pp. 306ff esp. pp. 321, 356. の外、Hilton, R.H., *The Decline of Serfdom*, 1969. など参照。
- (50) Thirsk, J., *English Peasant Farming: The Agrarian History of Lincolnshire from Tudor to Recent Times*, 1957 以下に於て。
2°
- (51) Ibid, pp. 6, 8, cf. p. 11, Map. II.
- (52) Ibid, pp. 108—9, 111.
- (53) 一六三三年、Heckling のエンクロージャーが、合意によるものの唯一例である。Ibid, p. 115.
- (54) Ibid, p. 116.

- (55) 例えば、フェンランドの湿地は、フェルムイデンの計算したほど年間を通して湿潤であるということではなく、年に九ヶ月は放牧に適した土地として機能した。Ibid, p. 111.
- (56) Hareby の極端な例では、干拓された土地は事業施工者、領主、国王により三等分されると言うものであった。Ibid, pp. 117—8.
- (57) Hatfield, Great Level の干拓は、それ以前には経験されることのなかった洪水を、周辺にもたらした。Ibid, p. 120.
- (58) Ibid, p. 123.
- (59) Ibid, pp. 124—5.
- (60) Ibid, pp. 124—5.
- (61) Ibid, pp. 126ff.
- (62) その法的理由としては、土地の権原をめぐる問題回避する傾向にあったことが、アドヴェンチュアラーズの土地回復の訴えを却けた理由として考えられ、また内戦における議会による王党派の財産の没収・売却がこの問題を錯綜させ、土地の回復を阻んだと考えられる。
- Ibid, pp. 125—6.
- なぜ、ejectment の勃興、real action の衰退、それによむる seisin 概念の不明確化、seisin と title の関係の変容については、
- Holdsworth, W., A History of English Law, vii, pp. 23—36. を参照。
- (63) Thirsk, pp. 41—2.
- (64) Ibid, pp. 28, 128.
- (65) Ibid, pp. 34—5.
- (66) Ibid, p. 138.
- (67) Ibid, pp. 128—9, cf. p. 39.
- (68) Ibid, pp. 140—1.
- (69) Ibid, p. 79.
- (70) Ibid, p. 84.
- (71) Ibid, pp. 86—7.
- (72) Ibid, pp. 170—1, 172.
- (73) Ibid, pp. 159—160.
- (74) Ibid, pp. 163, 173—5.

- (75) Ibid, p. 166.
- (76) Ibid, p. 168. cf., Helleiner, K.F., *Death to the Eve of the Vital Revolution*, CEHE, iv, pp. 82-3.
都市への農村人口の流入がもたらした文化・社会的変容について、時期的にはやや遅れるが、角山榮・川北稔編「路地裏の大英帝国——イギリス都市生活史——」が興味深い。
- (77) Cf. Spufford, op. cit., p. 165.
- (78) Tawney, pp. 59-97, esp. pp. 63-6.
- (79) その他「ウォラーステイン」前掲書II、一四九—五二頁参照。
- (80) Davenport, F.G., *The Economic Development of a Norfolk Manors; 1086-1565*, 1906, rep. 1967, pp. 81-3.
- (81) Thirsk, AHEW, iv, pp. 602, 605.
- (82) Hoskins, W.G., *Provincial England: Essays in Social and Economic History*, 1963, pp. 131ff.
- (83) Cambell, M., *The English Yeoman under Elizabeth and the Early Stuarts*, 1942, p. 135.
- (84) Thirsk, AHEW, iv, p. 600.
- (85) Spufford op. cit., pp. 50-1, 52-3, 78.
- (86) Thirsk, AHEW, iv, pp. 222-4, 228-9.
- (87) 大野「藤本保有」三七—六頁参照。
- (88) Hoskins, *The Age of Plunder*, p. 61.
- (89) Thirsk, AHEW, iv, pp. 674-5, 683, Hoskins, *The Age of Plunder*, p. 65, cf. Spufford, p. 76.
- (90) ウォラーステイン「前掲書I」一五二頁。
- (91) Cf. Holdsworth, HEL. vii, pp. 238-9, 299ff. の外「ストーン」前掲書、一〇二—三頁参照。
- (92) Thirsk, pp. 686, 689, 690, 694-5.

※本稿での議論をすすめてゆくうえで、表、グラフ、地図など挿入すべきであったが、相当の紙幅が必要とされ、やむを得ず割愛せねばならなかった。説明にかなりの煩わしさがあつたのではないかと思う。